

幕末の最先端グローバルな武雄

なぜ武雄領は洋学を取り入れることができたのか？



長崎警備図



阿蘭陀船「通航一覧所載写図他」より

約200年間、日本は長崎の地でオランダと貿易を行います。オランダはキリスト教を布教しないことを約束し、ヨーロッパの中では日本と商業貿易ができる唯一の国となりました。幕府は長崎を福岡藩と佐賀藩に警備するよう命じます。佐賀藩にとって多大の緊張と負担になるものでしたが、進んだ西洋の文明に接し、海外の情報がいち早く入手する好機となりました。

長崎警備と海外情報

他の地域は取り入れなかったの？

藩主による異国趣味的な蒐集(しゅうしゅう)、医学的見地から医者たちによる西洋医学の導入などはありました。「武雄領」という領主が筆頭にいた一地域で積極的に取り入れたというのが、武雄の特徴です。武雄の洋学は、やがて藩主・鍋島直正主導のもと、「佐賀藩」全体へと影響を与えました。

なぜ武雄は積極的に洋学等を取り入れたの？

江戸時代後期、相次ぐオランダ以外の欧米各国(イギリス、ロシア、アメリカ等)からの船の到来により、長崎警備に携わることから、対外的な危機意識が高まったため。また、武雄領主である鍋島茂義の趣味・嗜好も影響していると言われています。

虫眼鏡



オルゴール時計



天体望遠鏡



絵具(プルシアンブルー)



オランダ焼物

それ、武雄領が始めます。

Make It! TAKEORYO

武雄領主の鍋島茂義は、長崎警備で触れた西洋文明や海外の情報を積極的に取り入れ、佐賀藩や日本の発展の基礎を支えることとなります。2019年に発表した武雄市のキャッチコピー「それ、武雄が始めます。」を1830年代から実践していました。



鍋島茂義

モルチール砲(試薬モルチール)



ボンベン野戦砲



西洋砲術始めます。

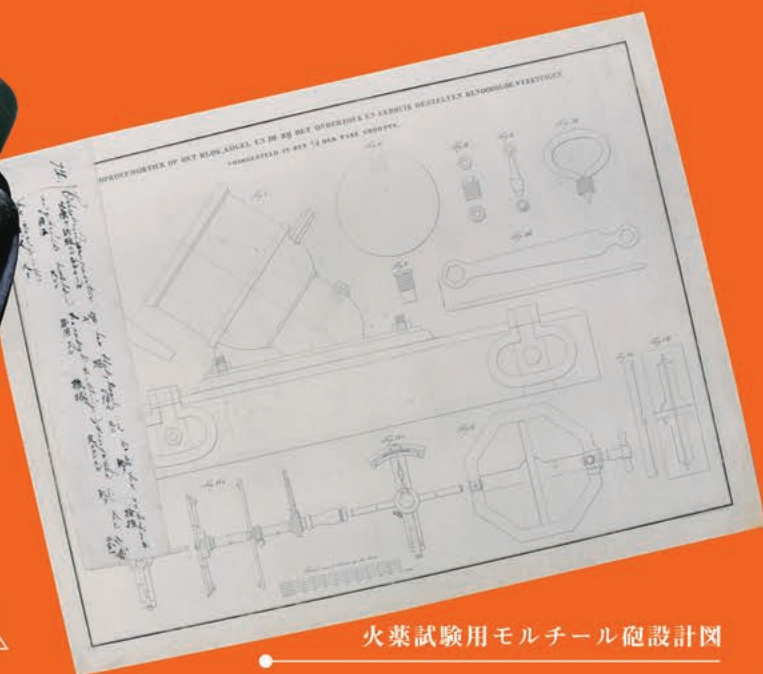
西洋砲術・・・当時最新の大砲を造る技術、大砲を使った軍事演習。

長崎警備の関係から、軍事力強化は喫緊の課題でした。鍋島茂義は、当時最先端だったヨーロッパ式の軍事技術や大砲を造る技術、撃つ技術の習得を積極的に進めようとしていました。家臣を西洋砲術の第一人者である長崎の高島秋帆のもと入門させ、2年後には自らもその門をたたきました。また、高島は武雄を訪ね、日本人によって作られた日本最初の西洋式大砲モルチール砲をもたらしました。その翌年、茂義は高島から砲術修行の修了を認められ、以後、武雄では砲術演習などが活発に行われました。佐賀藩の藩主、鍋島直正は武雄が行った大砲試射を見て、藩に西洋砲術を導入することを決意します。これにより、佐賀藩は急速な近代化に成功し、幕末維新期での活躍へとつながりました。



スコットランド製火薬缶

モルチール砲



火薬試験用モルチール砲設計図